
変わりゆくもの

縁異

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わりゆくもの

【Nコード】

N0495W

【作者名】

縁異

【あらすじ】

「みんな、さよなら」

万物は変わるもの。紅魔館でもまた、一つの変化があつた。

もつとみんなといたかった、でも自分の体力に限界を感じたパチ

ユリーは……………

しばしば東方とは関係ない音楽ネタが入ります。」

(ア

「テスト名」の名で遊ぶな！」という人はバック推奨。

紅魔館。

ある日幻想郷にある湖の近くに出現した、真つ赤な建造物である。そこには1人の吸血鬼を主として、その吸血鬼の妹や妖怪、悪魔、魔法使い、人間、数多の妖精達が住んでいる。

館、とだけあって外も中もとても広い。館の外、つまり庭園は幻想郷中の人間や妖怪全てを集めて野外パーティーが出来る程であり、館の中には大図書館が設備されており、それは館のほんの一部ではない。

そんな紅魔館の一室、主である吸血鬼　レミリア・スカーレットの私室に集まる者達がいた。

紅魔館の主、レミリア・スカーレット。

主の妹、フランドール・スカーレット。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。

紅魔館の門番、紅美鈴。

大図書館の司書、小悪魔。

大図書館の管理者、パチュリー・ノーレッジ。

この6名である。

5人に重大な話がある、とパチュリーがレミリアに言い、皆を収集するように頼んだのだ。そして一片の欠けもない月が静かに輝くこの夜に、香しい紅茶と甘美な茶菓子が置かれた円卓を囲むようにして6人は集まった。

「で、重大な話って何かしら？」

口火を切ったのはレミリアだ。普段この面子を収集するのは彼女自身の考えがあつてのことだが、今回は珍しくパチュリーに頼まれてのことだった。つまりレミリアは何も知らずに収集したのだ。詳

細を知るのは発起人のパチュリーだけだ。

そのパチュリーはというと、いつものように本を読んで　いなかった。普段この6名が繰り広げる会合の中、彼女は自分が発言する時以外はずっと本を読んでいる（本を読みながらも話は聞いているのだが）。しかし今日のパチュリーは、本を読む所か持ってきてさえいなかった。

それくらい重要なことなのだろう。それに気付いた5人は、表情を真剣な物に変えた。

そして、彼女は告白した。

「……私はもう、この辺で退こうかと思う」

突然のことだった。あまりに突然すぎたので、5人全員が驚きを隠せないでいる。

「退くつて、何を……」

フランが問いたです。しかし彼女もパチュリーが何を”退く”のかは、心の内で分かっていた。分かっているのだが、信じたくなかった。

「この面子の中で私が退くものといったら、あれしかないでしょ」

しかしパチュリーの答えによって、信じざるを得なくなった。

「……いやだ」

ポツリとフランが呟く。そしてフランは席を立ち、泣きそうな

声で叫んだ。

「いやだよ！！ パチュリーがいなくなるなんて！！ パチュリーがいなくなったら、私たちはどうすればいいの！？ ねえ、パチュ」

言葉が終わらない内に、レミリアはフランの口を塞いだ。そしてレミリアは冷静に言葉を紡ぐ。

「忘れたのかしら？ 今はその名で呼んじゃ駄目」

レミリアに言われて、少しは落ち着いたようだ。フランは静かに席に着く。

次に口を開いたのは、美鈴だった。

「……理由を、訊いてもよろしいでしょうか」

しばしの沈黙。その後パチュリーは自嘲するような笑みを浮かべて語り出した。

「もうね、体が持たないの。ほら、私って体力無いし、しかも喘息持ちでしょ」

パチュリーの言葉に、皆が納得した。”退く”理由を、納得してしまった。

「本当は、もつと皆に付いていきたかった。皆と一緒にいたかった。でも、もう私は潮時なのよ」

皆、何も言えなかった。慰めなど、励ましなど、出来なかった。

「K P」

重い空気の中、咲夜がパチュリーの名を口にした。

いや、今のパチュリーは『パチュリー』でも『パチエ』でも『パチエ様』でもない。この場において彼女は『パチュリー・ノーレッジ』という名を置いてきている。パチュリーだけではない。レミリアも、フランも、咲夜も、美鈴も、小悪魔も、本来の名は置いてきた。

「確かに、K Pがいなくなるのは正直寂しいです。ですが、K Pが悩んで決めたことなら、私は何も言いません。私共は私共で何とかやっていきます」

「……ありがとう、サク」

咲夜　サクに言われて、K Pは安心した。皆が自分を引き留めないか不安だったのだ。

「あ……あの……」

続いて口を開いたのは小悪魔だ。彼女は悲しみを出すまいと声を小さくしているが、それでも震えていた。

「1つ、よろしいでしょうか」

「何？」

「K Pが私達の下から離れても、K Pの代わりが入っても、K Pは私達のことを好きでいてくれますか？」

「……当然。だから私がいなくなっても、しっかりやるのよ。コアク、分かった？」

小悪魔　コアクは、この話を聞いて不安になったのだ。K Pがいなくなつて、私達に興味を示さなくなつてしまつたら、というという不安を。

しかしK Pはコアク達のことを好きでいると言つてくれた。それならば、K Pの言うことを信じるしかないと思つた。

「K P」

美鈴が言葉を發した。

「私達、頑張りますから。あなたの分まで」

だから、と続きを言う前に、フランに先を越されてしまつた。

「ずっと、応援していてね」

K Pは、我慢出来なかつた。涙腺が限界を迎えた。

「……ありがとう。皆、今まで……ありがとう……！」

溢れ出る涙を必死に抑えようとするが、それは不可能だつた。止めようとしても止められない。

だから、レミリアはK Pを抱きしめた。抱きしめて、別れの言葉を告げた。

「……さよなら、K P」

この夜、パチュリーは『K Pサート』の名を捨てた。

ところで、この辺りになっても誤解していそうな読者諸君がいるかもしれないので、一応表記しておこう。

紛らわしいわ！ とかわれるのを覚悟で表記しておこう。
これは、バンドの話である。

別にパチュリーが紅魔館を去るという訳ではない。

事の発端は、八雲紫が外の世界とあるバンドのライブを目にしたことから始まる。そこで紫はこう感じた。

革命だ、と。

これを幻想郷に持ち込めば、『弹幕ごっこ』以来の変化が訪れるのではないかと。

そこからの紫の行動は早かった。彼女は余るだけ持っている外のお金の一部を使い、そのバンドが使っていたのと同じ楽器を仕入れた。そして藍と橙、さらには霊夢まで巻き込んでバンドを結成。

この時こそ幻想郷初のバンド、『8km Parade Illum Bullet』の誕生だった（因みに”8km”は”やくも”と呼ぶ）。

4人は博麗神社で行われた宴会の際に自分達の音楽を披露した。宴会に参加した内の何人が『8km』に惹かれたかは分からないが、その場にいた全員が、ギターやドラムを使った新しい音楽に興味を示したことは言える。

次に動いたのは守矢神社の3柱だった。風祝である東風谷早苗は宴会の翌日に紫に頼んで3人分の楽器を仕入れて貰った。そして八坂神奈子と洩矢諏訪子の2柱を引き入れる。それを聞きつけた射命丸文と文に無理矢理連れてこられた犬走椋が参加、『サナエクシヨン』を結成した。

すると他の面々も音楽に興味を持ち、自分達も音楽というものをやりたいという意志を持つようになった。その結果、ポップからメタルまで、様々な音楽グループが誕生することとなった。

白玉楼に住む2人からなる、爽やかな音楽が特徴の『ゆゆず』。春妖精が中心となって誕生したポップパンクバンド『The Lilyspring』。

慧音が人里の可愛い女性を集めまくって作成したアイドルグループ『KIN48』。

てゐとうどんげが中心となって兎達を巻き込んで組んだ、ダンスと音楽を混ぜ合わせたグループ『ウサテイル』。

輝夜と永淋が組んだ2人組ユニット『BAMBOOM BOOM SATELLITES』。

そんな輝夜に遅れを取ったと感じた妹紅はプリズムリバー3姉妹

を捕まえて『MOCOLDBLAY』という内省的ロックバンドを結成した。

妖怪の山では、『サナエクシヨン』に感化されたとりは河童の技術力を生かし、『NITRYPTON』という会社を設立。様々なDTMソフトを作成した（早苗の力を借りて作られた『奉歌口イド』祝音サナ”もその1つ）。

さらに、地霊殿でも『ONE OKU ROCK』が誕生。

果てには、命蓮寺の面々の内の5人が『命蓮座』なる和風メタルバンドを結成する始末。

幽香は『YUKA』名義でソロデビュー。

アリスはチルノとまさかの音楽性の一致が見られ、勢いで『Alice?』を結成した。

他にも様々な音楽グループがあるが、これ以上はキリが無いので割愛させて頂く。

とにかく、幻想郷の音楽シーンは八雲紫の思い付きによって一気に発展したのであった。

そう、レミリア達もその中の1グループである。

メロディックスピードメタルバンド『DraculaForce』。それが紅魔館で誕生したバンドの名だ。

ボーカル担当、”KPサート”ことパチュリー・ノーレッジ。

ギター担当、”サク・ヤットマン”こと十六夜咲夜。

同じくギター担当、”ホンメイ・リ”こと紅美鈴。

キーボード担当、”レミリヤージュム・プルジャーフ”ことレミ

リア・スカーレット。

ベース担当、”フラデルク・ルクレルク”ことフランドール・ス

カーレット。

ドラム担当、”コアク・マッキントッシュ”こと小悪魔。

この6人からなるバンドだった。

しかし先日KPが脱退したので、今は新ボーカルを募集中である。

「レミイ、DraculaForceの新メンバー、決まった？」

大図書館にて読書をしに来たレミリアにそう訊くのは、元”KPサート”。彼女は皆との約束通り、バンド脱退後もレミリア達を応援していた。

「全くよ。試しにメイド妖精に歌わせて見たけど、あなたの代わりになるくらいの実力は無かったわ」

レミリアの言葉通り、メイド妖精達には光る物が無かった。

「湖の妖精達は？」

「同じく。氷の妖精は良かったけど、彼女は彼女でバンド組んでるから駄目」

「他は？」

「秋姉妹は……秋しか活動できないから駄目。鬼達は鬼達でこれからバンド始めるみたい」

「……意外と見つからないものなのね」

ボーカル脱退。それはDraculaForceの面々が今までブチ当たってきた壁の中で、一際高い物だった。

「……はあ、じゃ、今日も行ってくるわ」

「何処に？」

「決まってるじゃない。新メンバー探しよ」

「……抜け出した私が言うのも何だけど、頑張ってね」

レミリアは本を閉じると、DraculaForceの面々を連れて紅魔館を出た。

香霖堂にて。

「あなたの好きな一曲を歌いなさい」

言われるがまま、霖之助は歌った。というより、吐いた。

「……………!!!」

「……………レミリヤージム、どうされます?」

「……………音楽性が違うわ。私達の音楽にグロウルとか不要よ。という訳で却下」

因みにグロウルとは、族に言うデスボイスのことである。

地底へと続く穴にて。

「何でもいいから歌いなさい」

パルスィは息を吸うと、思うがままに歌った。

「妬エエエたましい、妬ましい」

「何、この曲……」

「レミリヤージム……どうします?」

「却下。聴いてるところちまで鬱になるわ」

因みにこの曲、パルスィが即興で作った物である。

三途の川にて。

「……歌を歌いなさい」

小町は歌った。いや、詠った。

「サボりたい あゝサボりたい サボりたい」

「和歌じゃねーから！」

「レミリヤージム、キャラが崩壊してるよ。
で、どうするの？」

「却下！！」

レミリアは帰ってきてからも大図書館に来た。

「あー、畜生ー」

新メンバー見つかんねー」

「レミィ、キャラが崩壊してるわよ」

疲れきったレミリアには、カリスマの力の字も無かった。

「あーあ、空からボーカルが降ってこないかしら」

「降ってこないわよ。空からなんて……………あ」

「パチュリー？」

「もしかしたら、彼女なら……」

「彼女？」

パチュリーの言う彼女とは、誰なのだろうか。レミリアがそう思った時だった。

けたたましい轟音と共に、大図書館の天井の一角が破壊されたのは。そして現れたのは1人の魔法使い。

「パチュリー、久しぶりに本を借りに来たぜ！！」

霧雨魔理沙。パチュリーが言った”彼女”その人だった。

「……咲夜！！」

「……小悪魔！！」

レミリアはたちまちメイド長の名を呼び、パチュリーは司書の名を呼ぶ。すると咲夜は一瞬でレミリアの下へ参上し、小悪魔は出来るだけ早くパチュリーの下へやってきた。

レミリアは咲夜に命令する。

「美鈴とフラン、いえ、ホンメイとフラデルクをここに呼んで頂戴

」！

「！！」

「……かしこまりました！」

レミリアの意志を汲み取った咲夜は一瞬でその場を離れ、数秒後に戻ってきた。

「な、なんかヤバイことになってきたぜ」

事情を知らない魔理沙は、自分がこれから集団でフルボッコにされてピチユる構図を想像した。

「クソッ、逃げるが勝ちだ」

ぜ、の単語が口から出る前に、彼女は無数のナイフに囲まれていた。

「逃げられると思って？」

言うまでもなく咲夜の仕業だ。

そうこうしている内に、美鈴とフランの2人がやって来た。

「クソッ……集団戦になったら……私は本を借りることも出来ないのかよ……！」

魔理沙の眩きを無視し、歩み寄る5人。そしてレミリアが命令した。

「魔理沙、歌いなさい」

「……は？」

「歌いなさい、と言ったのよ。あなたが好きな歌を、一曲」

訳が分からなかった魔理沙は、これでピチユらなくて済むならと妙な解釈をして歌った。

見事だった。

流暢な英語詞。何処までも伸びるハイトーンボイス。そして何より、魔理沙の歌った曲のジャンルはメロディックスピードメタル。そつ、音楽性も、声の質も、歌い方も、どの点においてもD r a c

U l a F o r c e にピッタリだった。

「……………！」

「これは……………」

「すごい……………」

「完璧だ……………」

「ピッタリ……………」

故に、D r a c u l a F o r c e の面々を満足させるのには満足だった。

「これでいいのか？」

魔理沙がおずおずと訊く。

「魔理沙……！」

「は、はい……！」

「あなた、私達のバンドのボーカルになりなさい……！」
「……………はい……？」

こうして、D r a c u l a F o r c e は新たなボーカルを迎え入れることとなった。

その名は霧雨魔理沙改め、” マーリ・サドソン ”。

新生『D r a c u l a F o r c e』の誕生だ。

DraculaForceと同じように、人は生きていると必ず壁にブチ当たる。もしかしたら、乗り越えられない壁かもしれない。それでも、足掻いて欲しい。足掻いた先に、光が見つかるかもしれないから。

って、けーねが言ってた。

（後書き）

歌詞を乗せるとアレだけど、アーティスト名ならいいかなと思って書きました。

以下ボツネタ

永遠亭

『Bamboo of Chicken』
『FAC兔』

白玉楼

『MYOOM MYOOM SATELLITES』
『THE YOOM』

博麗神社

『HACT』
『レイムロメン』
『REMA RI』

妖怪の山

『戦音力ナ』
『崇音スワ』

その他

『U婆World』
『婆fume』

全部分かったあなたは凄いです。

正解は感想返信にて（希望者のみ）！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495w/>

変わりゆくもの

2011年10月6日17時08分発行